

Title	斉藤恵子さん居りますか<特集：図書館の浸水事故と復旧>
Author(s)	榎, 武
Citation	バベルの図書館：総合人間学部図書館報 (2005), 9(2): 16-18
Issue Date	2005-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/153043
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

斉藤恵子さん居りますか

榎 武

クリスマス・イブを迎える日の深夜、二郎は脳幹の活動を低下させることができず、彼女より貰った LAPHROAIG を Robert Johnson の奏でるギターとともにひとり楽しんでた。突然リビングの電話器の呼び出し音が二郎の活動を失いつつある脳幹細胞を破壊させる勢いでけたたましく鳴り響く。「お世話になります・・・斉藤恵子さん居りますか」いつもの男の声である。二郎はこの男と面識もなく斉藤恵子がどんな女性かも知らない。心象では髪はボブカット。背丈は 168cm。日焼けした 51kg の裸体が夕日で輝く浜辺のシルエットによく映える 30 歳をすこし過ぎた女性である。一方、男の年齢は 58 歳。痩せ型でイタリア製の高価な背広に PRADA の細身のネクタイを締め、右の腕には OMEGA の Speedmaster を着けたシャイなヤツのようである。最近は酒を飲みながら運転しなくなったこの男は、タクシーで恵子を迎えるためにいつものようにこの時間、この店に電話をかけてくるのである。

二郎がふたりの関係を創造する時間をもつのは、この時間に電話がベルを鳴らす時に限られる。ふだんの二郎の脳裏には恵子も男も存在しない。この男は好きなものに対してはやさしく、もの静かな穏やかな性格であるが、嫌いなものにはひとが驚くほどの冷淡な性格である。その性格がもつて 6 年前に女房と娘に逃げられ、今はひとり気楽な生活をしているようである。・・・恵子との関係は 3 年 10 ヶ月。親子ほどの年齢差。深夜の交際。ふたりの仕事は。離婚した妻。娘の婚約者。男と女。空虚。不条理の深淵。

そんな他愛ない創造の時間にも、13 時の垂鉛鋼管を破壊した水は閲覧室の床を覆いつくしながら玄関へと流れ出していた。さらにその水は閲覧室の床の亀裂から地下書庫に浸透し、そこに収蔵されているフランス綴じの書物や第三高等学校の教育教材の地図やプレートに降り注いでいた。

この朝、いつもどおり寝覚めた二郎は、シャワーを浴び、コーヒとサラダトーストで朝食をすませ、職場の図書館に向かった。図書館の玄関に着くと足拭きマットやモップ、バケツが無造作に投げ出されている。24 日の今日、なぜ床の掃除しているのかと怪訝であった。年末の休館は 25 日からである。職員が休館日の始まりを間違い掃除の依頼をしたのではないかと考えながら二階へ通じる階段を上り部屋に入り、浪野さん、富田氏と挨拶を交わしたが、いつもの富

田氏ではない。トレーナー姿に長靴を履いている。キョトンとしている二郎にふたりは「閲覧室の水道管が破裂し水浸しです」「午前 2 時に電話があり飛んできました」「二郎さんのところにも電話をなされたのですが出られなかったそうです」と昨夜の事故を報告した。

深夜の電話を受けなかった言い理由は終えることにして、水道管破裂の水害被害について報告することにする。

昨年 12 月 24 日未明、1 階閲覧室にある洗面台の給水管が破裂し、地下書庫に収蔵されていた書籍 3575 冊、掛図 266 種、420 点が水を被った。原因は配管が錆びていたところに休日で構内の水圧が上がって破損したとみられる。そこで水道管が破裂した日に緊急に館内の漏水や配管腐食の点検を実施したところ、館内の配水管に腐食が見つかり、10ヶ所の洗面台などをその日のうちに撤去・修繕を実施した。また、人環・総人図書館は 1973 (昭和 48、築 32) 年の高度経済成長期に建築された建物で、コンクリートの塩分で老化しているとの話も伺っている。

被災資料は、フランス語関係の洋書が多いほか、三高時代の講義で使用されていた明治期の重要な日本地図をはじめとする地図類や自然科学関係の掛図、図解プレートなどであるが、18 世紀に出版された洋書など貴重な書籍は無事であった。水害の被災資料は、事故当日の午前中に 2 階閲覧室に搬出するとともに、愛媛県の伊予より約 20 万枚の半紙を宅配便で取り寄せ、大学院学生ら 35 名を採用し翌日の 25 日から休日を返上、28 日の午後 5 時まで水濡れ資料のページの間に 1 枚 1 枚半紙を挟む作業を繰り返し行う。その後、年明けの 4 日まで閲覧室で自然乾燥を施し、5 日と 6 日の両日に燻蒸業者と表具店に燻蒸と修復を依頼した。燻蒸を依頼した書籍は、1 月 11 日と 17 日に燻蒸を終え図書館に戻ってきた。掛図などは 3 月初旬から修復が完了し燻蒸を終えたものから順次戻ってくる予定である。

今回の水道管破裂にともなう被災損害額については、書籍の燻蒸費用が 100 万円、掛図の修復・燻蒸費用が 520 万円、半紙を挟む作業費が 100 万円、施設修理費が 89 万円とその他の諸々の経費を加えると総額で 800 万円を超える金額となる模様である。

今回このように被害を大きくした原因は、日常の点検・管理を怠っていたことに加え、止水バルブの箇所を探すのに時間が掛かったことと、その止水バルブ

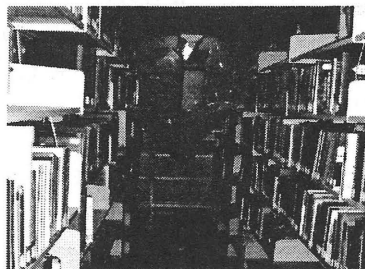
ブが錆び付いて動かなかったことにある。これから建物を建てる計画をされている図書館では、各階単位の止水がひとつのバルブでき、止水栓は回転式ではなくレバー式の取り付けをお奨めする。また、バルブを設置する場所もトイレのなかのパイプ・スペースなどに設けるのではなく、誰もが眼にする消火栓口に隣接するところが良いと考える。

以上がクリスマス・イブに発生した水害の報告とともに 800 万円の代償で得た教訓である。最後に 24 日深夜の電話を受け図書館に駆けつけ、凍える水を身体に浴びながら朝方まで止水作業などに奮闘して下さった共通教育推進室の田中進氏と人間・環境学研究科総合人間学部図書館の岡岡達治氏、石田弥寿子さん、そして石田さんを車で送りそのまま作業の手助けをしていただいたご主人に心より感謝いたします。また、被災資料の乾燥を防ぐために暖房装置を止めての作業となり、寒さで身体が凍え指先がしびれたに拘らず、帰省の日程やアルバイトの予定をキャンセルするなどして作業を引き受けていただいた多数の大学院学生に感謝いたすとともに、彼らに緊急動因の要請を願い、彼らのまとめ役までしていただいた大学院人間・環境学研究科学生の山村仁朗氏には心よりお礼を申し述べるものである。

「斉藤恵子さん居りますか」深夜電話のベルは昨夜も鳴らない。

(まき たけし、人間・環境学研究科総合人間学部図書館)

Photo Album 3



水に濡れる地下書庫の資料
応急処置として、資料にごみ袋をかぶせた